

元来、文字というものは、言葉を記憶するためにつくられたものです。「初めに言葉ありき」と聖書にも書かれているように、おそらく人類はこの世に誕生すると、すぐに言葉というものを使うようになったのでしょう。人間に次いで知能の高い動物はチンパンジーであるといわれています。このチンパンジーに言葉を教育した学者がアメリカにはたくさんいます。1930年代、アメリカの学者たちはチンパンジーに言葉を教えるため、涙ぐましい努力を払ってきました。

チンパンジーを自分の子どもと一緒に育てたのです。同じ洋服を着せて、同じ食べ物を食べさせて、同じようにあやして育てたのです。双子の兄弟として育てたようなものです。ところが、どんなに苦労してもチンパンジーの脳は人間の子どものように成長しません。チンパンジーに言葉を覚える能力がないのが原因です。面白いことに、人間の子どもが言葉を覚えるまでは、チンパンジーの知能は人間の幼児とほぼ同等です。むしろ同等以上と言ってもいいくらい知能が高いのです。にもかかわらず言葉が覚えられないのです。

人間の赤ちゃんは、二歳くらいになると盛んに言葉を覚えて、三歳から四歳になるとほぼ完全に母国語をマスターして、親の言うことが理解できるようになります。そして、自分の意志を表現することもできるようになります。こうなってくると、人間とチンパンジーとの知能差というものは歴然としてくるわけです。

知能の源泉が言葉にあるということは、この試みでもわかります。進

歩の原動力は言葉なのです。言葉が豊富になり、知識が豊かになるから、人間は素晴らしい生活ができるようになったのです。ところがチンパンジーは、せっかく自分で得た知識や知恵を、言葉を媒介として子孫に伝えることができません。

単純に生物として生きる本能はともかく、いくら世代を重ねてもそれ以上の進歩はあり得ないのです。いつまでも同じような生活をただ繰り返すだけです。100万年前のチンパンジーと現代のチンパンジーと、生活上に何か変化があったかという、目を見張るような進化はありません。それというのも、チンパンジーには言葉がなかったからです。

人類はこの100万年の間に大変な進歩を遂げました。しかし、調べてみると100万年の歴史の中で、99万年の間はあまり進歩はなかったようです。チンパンジーと比べてもさほど変わり映えのない生活を送っていました。

それは人類が食べ物を得ることだけで終わってしまっていたからです。食べ物を得ることは自分の命を保つということ、家族を養うということで、実に大変なことでした。木の実を拾ったり、小さな生き物を捕らえて食べていたわけですが、保存がききません。食糧がたくさん確保できたとしても、夏の真っ盛りに一日経過したものを食べたら、中毒を起こして死んでしまいます。ですから、毎日毎日食べ物を追い求めて、それで一日が終わってしまっていたのです。一万年前までの人間の生活は動物と大して違いがなかったわけです。